

婚活連敗ハイスぺ女子、

# クズ魔術師に執着されて

子作りするので元の世界には戻りません！

プロローグ ————— 1

一章 現代社会の会社員 ————— 12

二章 異世界人と迷い人 ————— 43

三章 雇用主と使用人 ————— 72

四章 覇級魔術師の所有物 ————— 173

五章 覇級魔術師の花嫁 ————— 305

エピローグ ————— 331

## プロローグ

初め、ゼノは一華のことを「口うるさい女」だと毛嫌いし、異性としての興味は一切持っていなかった。だんだん世話好きで面倒見の良い一華に構われていくうちに、情が移った。

『アンタも、処女捨ててきたら抱いてやるよ』

あれは一華を異性として認識し始めた頃、仕事にバカ真面目な一華を嘲笑って言った台詞だ。実際、一華はこの世界に來た時点で処女ではなかったが、本当にそれが実行されていたのなら、ゼノは相手の男を殺していただろう。

後ろから左右両方の腕を引っ張りあげられながら白い背中を反らして下から突き上げられる一華はじつに良い声で喘ぐ。

「ンほおおッ！ おぶッ、おヅッ、おッ、んほッ、オほおおおッ！」

「あゝゝつ、ほんと最高だわ。アンタのまんこ、俺のちんぽにきゅーきゅー

しがみついてくるなあ。ははッ、顔も真っ赤にしゃがって、ほんと可愛いすぎだろ。俺、アンタじゃないともう勃起そうにないわ」

白い歯を剥き出しにしてゼノは笑う。激しくちんぽ出し入れしながら、長期間に続く淫紋の使用で発達した一華の釣り鐘型の乳房を鷲づかみにし、根元から乳首にかけて絞るように扱いていく。すると、噴水のように細い二、三重の白い水流ならぬ乳流が噴き出して甘い匂いと共にゼノの手を汚すのだ。

「あア~~~~ッ、あんっ、あッ、……あんっ、おっ、アアッ、あああッ！」

「すげえ母乳の量。まじで乳クセえわ」

親指でグリグリと潰していた乳首をパクツと口に咥え、ゼノは「じゅうッ、じゅうううッ」と強い力で吸いあげる。

「イひいッ！　だアッ、だアめだめだめえええ~~~~ッ！　そんなことされたらっ、おっぱいだけでえ、おっぱいだけでイっちゃうからアああッ~~~~~~~~、ン、んあああああ~~~~~~~~ッ!？」

下腹部に刻まれた淫紋はピンク色に発光して一華の快感をさらに倍増させていく。乳輪ごとしやぶり、ゼノは愛おしさのあまり何度も噛み跡を残す。痛みを感じていないのか、やめてくれるよう懇願していた一華の喘ぎ声は段々と意味をなさない嬌声に変わっていった。

乳房を攻めながら、陰茎を膣の最奥まで埋め込み、子宮口に密着させている亀頭でそこを押し潰すように刺激する。カリの反り返りが、いつまでたっても夫のサイズを過小評価する物覚えの悪いまんこを叱るように無理やり押し広げていく。

ごちゅんッ、ごちゅんッ、と子宮口にめり込むくらい酷くちんぽを突き入れると、一華は強すぎる快感に全身をくねらせながら痙攣し、汚い喘ぎ声をあげて絶頂した。

「おッ、ほオおおおお~~~~~ッ！」

ぷしゅ、ぷしゅつ、と潮が噴き出して床に水たまりを作る。

後ろから腹に手を当てて身体を支えてやると、一華は「もっと」とねだ

るように腰をへこへことゼノに押しつけてきた。子宮口は注がれる熱い迸りが注がれるのを期待してすでに下りてきている。ぷにぷにとした入り口の感触を亀頭で感じ、もつと虐め

てもいいのだと理解したゼノの口角が自然とあがった。

一度くらいの絶頂ではまだ足りないらしい。

「おい、もつと本気で腰振れよ！ 俺のガキ孕みたいんだろ!？」

「はひいっ、孕みイッ、たひい、でしゅうっ！ ほんきでっ、オオッ、おまんこオおっ、しましゅうッ！ だアんな……しやま、うッ、お、おおッ、おちんぽオお~~~~っ、おまんこでええ、しごきましゅううううッッ！ お、おッ、んほおっ、ンおおお~~~~ッッ！」

「イク時はちゃんとイクって言えよ。ご主人さまの許可なく勝手にイってんじやねえぞ」

「おほッ、おッ、おッ、おお~~~~ッ！ イぎッ、いきいましゅっ、イぎいましゅっ！ うッ……アッ、アクメええっ、しましゅう~~~~ッ、ほおッ、ん

ほおおッ、イグイググッ！ おしっこおッ、もれりゅううううッ!!」  
「つたく、低ッい喘ぎ声でテキトーな返事してんじやねえーよ！」

淫紋の効果で肥大化した乳房と同じく、初めて出会った頃より一回り大きくなった一華の尻をゼノは平手で叩く。

「おッ、ふう！」

一華の背中がのけ反り、ちんぽをくわえ込む女の穴が反射的にきゅッ、と締まった。

「あッ？ やればデキンじゃねえーか。今までまんこサボってたのか？  
ビンタされねえーとまんこもまともに使えねーとか、性奴隷以下じやねーか。引き取った俺をがっかりさせんなよ、ほら！」

「ごッ、ごめんなしやいッ、ごめんなしやいッ！ もっと、おっ……ちんぽしやま、にい、ごほうしい、しま、しゅうううう~~~~ッ!!」

尻をへこへこ動かして必死にまんこでちんぽをくわえ込む。ぬちゅぬちゅ、とガン勃ちしたちんぽに媚びを売るが、お粗末なストロークではゼノ

の巨根をもつてしても子宮口に届かない。子供の遊びのような腰ふりにゼノはイライラする。

「バカにしてんのか？　こんなヌルい腰へコじや射精できねえーだろ！」  
苛立ちのままゼノは腰を打ち付けた。ぷつくりと腫れた褌がゼノの腹に張り付いてそのままぺちゃんこになるまで押し潰された。ぎゅうぎゅうと密着した腰が離れていき安心したのは一瞬で、またすぐに腰が打ち付けられてゼノの亀頭で何度も何度も子宮口をど突きまわされる。逃げ出そうにも腰を両腕でがっちり固定されているため逃げ出せない。足がバタバタと空を蹴る

「おほッ!?　んほおおおおお~~~~~ッ!!」

挿入する度にどぷどぷと湧き出る愛液と先に注いでいた精液とがおまんこの中でぐちやぐちやに泡立って膣と陰茎のわずかな隙間からあふれ出す。身体に力が入らなくなった一華はよろけてその場に座り込むが、ゼノはそれを許さない。自分の射精を終わらせるのが先だと言わんばかりに身体

を密着させてちんぽを出し入れしながら自分も腰を落としていき、一華が座り込むと彼女の上体を床に押しつけ、腰を抱え上げながら獣のような体勢で性器を挿入し続けた。もはや、一華はゼノ専用のただのオナホだった。

「おッ、おッ、おッ、おッ、んはおっ！」

「あゝあ、なんて声出してんだよオ。こんなのが俺の妻とか、恥ずかしすぎて外、出歩かせらんねえーわ。こんなん、よくてメス豚だろ！」

「はひッ！ おオッ、んおっ、おッおッおッ、……ごお、ごめんなあ、しやひッ……おッ、おッ、めす、ぶたでえ、オオッ！ ……ごめんな、ひやいいい~~~~~っ！」

「メス豚が人間サマの言葉をしゃべってんじやねえ——……よおッ！」

「んほおおんッ!？」

一華が喘ぎ声も出せなくなってきた頃、ようやくゼノが熱い迸りを一華の中に放った。それはどぶどぶと一華の子宮に注がれ、肉筒の中を逆流して穴の外にあふれ出していく。頭を下にして抑えられた姿勢と、先ほどま

での容赦なく下からガンガン子宮を突き上げられる感覚で物理的に胃が押し上げられた一華の視界はぐらぐらと揺れる。

やがて、吐き気がこみ上げてきて、胃の中に流し込んでいたどろりとした白い液体を嘔吐した。それは、ゼノの精液だった。

「うげッ、最悪だな、アンタ。せつかく俺がいつくぱい愛してやったのに、よ」

「ううつ、おえッ、……げほ、げほッ」

身体を投げ出し、ぽっかりと開ききった穴から精液を溢れさせながら「ひゅー、ひゅー」とかすれた呼吸を繰り返す一華をゼノは腕の中に抱きかかえた。二人の子作りはこれで終わりではない。ゼノは枕元に置いてあった、太い矢印形のプラグを手にとって、緩んだ膣の入口にあてがった。八時間近くに及ぶ営みで気力も体力も限界に来ている一華はいろんな体液で顔を汚し、呆けた顔をしている。それでも、これから自分がなにをされるのか理解したようで、身体をわずかにびくつと震わせた。

「そんなにビビんなよ。これで最後だからなア」

ゼノは一華に自分が何をされるのかわからせてから、ゼノの巨根をしゃぶりすぎて拡がった穴にゴツイプラグを咥えさせていく。ゼノのものと比較して短小なそれはあつさり一華の胎内に治まった。

「うっ、おふッ……」

一華は股をすり合わせる。感じている違和感はプラグの圧迫感だけではない。魔術の効果が付与されたプラグは、一華の腹に刻まれた淫紋に連動し、挿入されている間は精液を子宮内に留めておくと同時に卵子の受精可能時間も延長させる。それは、一華の身体に残る性行為の快感の余韻がプラグを抜いてもらうまでそのまま残るということだった。

せつかくどろどろになるまでセックスしたのに、すべてリセットされてまたムラムラするなんて地獄のようだが、一華はゼノの子供を孕むために自分の意志でこの世界に残ったのだ。この程度の欲求不満、余裕で耐えなければならぬ。

「さすがにキツいか？　今日は魔導具の挿入はやめとくか？」

興奮して「ふう、ふうッ」と鼻息を荒くする妻を心配してゼノは声をかける。

「いひっ……のおッ、……ぜの、によ……あかちゃん、うむまでえ、がんばりゅ……おッん！　が、がんばりゅ、か、らア~~~~~っ！」

「そうか。エライよなア、一華は」

滅多に素直な微笑みなど浮かべることがないゼノが自然と笑う。容姿端麗な男の極上の笑み。中身はクズだが、一華は自分の夫になった魔術師の規格外なまでの容姿の良さを改めて再認識する。

（はあ~~~~、ほんと顔が良い~~~~）

その美しい顔はだんだんと一華に近づく。精液で唇を汚し、だらしない表情の一華にムラムラさせられたゼノは、唇を押しつけて舌を絡めた深い口づけをする。

苦い精液の味、酸っぱい胃酸の味がするが、ゼノは気にしなかった。一

華の舌をしやぶり、柔らかな頬の内側や上顎を舌で擦りつける。

「よしよし。今夜もまたいっっぱい出してやるから、俺たちの赤ちゃんを孕もうなあ♡」

「……う、ん♡ ゼノのあかちゃん、はりやむうの……♡」

目を蕩けさせ、一華はぎゅっとゼノにしがみついた。そんな一華のすべてが可愛すぎて、ゼノは天元突破している愛おしさのやり場に困惑する。一華の頭を撫でてやりながら、自分の欲望がこれ以上暴走して今すぐ子作りセックスを再開させないよう、ただただため息をつくしかなかった。

## 一章 現代社会の会社員

「名那本さんのお子さんが熱を出して急遽早退になった。今日は黒崎重工の接待があるんだが、だれか代わりに植村常務の補佐についてくれないか？ 必要書類は準備できているそうだ」

秘書室に入ってきた部長は開口一番そう切り出した。だれもが嫌な予感に顔を見合わせる。

本日は週末の金曜日。

秘書課のお姉様方はあきらかに気合いの入った装いをしている。指名されれば渋々上司の命令に従うかもしれないが、指名されるまでは絶対に自分から手はあげないという確固たる信念が漂っていた。

重たい沈黙が続く。

「——はい。わたし行けます」

張り詰めた空気の中で自主的に手を挙げたのは入社六年目の佐々木一華

だった。お互い牽制し合っていた秘書室の雰囲気は一瞬にして緩む。

貧乏くじを引かずに済んだ。佐々木一華以外の秘書は内心胸を撫で下ろした。

彼らにとって早退者が名那本秘書であるというのも重要な懸念のひとつだった。

時短明けの彼女は明らかに家庭と仕事が両立できておらず、期日までに割り振られた仕事が終わらないことが往々にしてあった。しかも、期限が迫ってくると締め切りの前日から家庭の事情ということでの休みを取る頻度が上がる。外部の講演や会議、挨拶回りで使用する原稿や資料作成。仕事がほぼ完了しているのであれば何も問題ないのだが、未完成なものが多いため毎回スムーズに引き継ぎができず、仕事を肩代わりした者がタイムリミットに追われて奔走させられるはめになる。

今回も、書類ができているという本人の自己申告を鵜呑みにすると、きっと恐ろしい目に遭うに違いない。

秘書たちは一華に同情の目を向けた。

「名那本さんは本日使用する書類はフォルダの中に入れていっていると云っていたが、どうだろうか？」

一華は高いヒールをカツカツと鳴らして名那本秘書のデスクから書類を引き出して確認し始めた。

理知的な瞳が素早く左右に動く。

「ダメです。このままの状態では使用できません」

「そ、そうか……今からやって、なんとか形になるだろうか」

一華は時計を見る。接待開始まで残り三時間ほど。自分の処理速度から書類をどこまで完成させられるのか見積もる。

（今から資料を読み直して原稿を書き直す。二時間あればできる。参加者名簿……これ、まだ途中じゃない!?）

「——課長。現在作成している報告書は週明けの提出でも構いませんか？」

「え!? あ、ああ、それはぜんぜん大丈夫だ」

デスクに座ったままおろおろと成り行きを見守っていた課長は急に話を振られて動揺する。

「であれば、なんとか形にはできます、部長」

「そうか。ならば、よろしく頼む」

「残業代はもちろん、特別手当のつくやつですよね？」

「も、もちろんだ。君は明日、出勤日だったか？」

「そうです」

「明日は担当専務の付き添いはないのか？」

「ありません。専務は数日私用で休暇を取りますので、わたしはたまった雑務をこなすためだけに出勤日になっているだけです」

「急ぎの仕事がないなら、明日は特別休暇を付与しよう」

「いいんですか!? ありがとうございます」

「こちらこそ、引き受けてくれてありがとう。植村常務は一時間後に出立される。それまでに準備を済ませて玄関に向かうように」

「かしこまりました」

両手を体の前で重ねた一華は微笑んでお手本のように美しい敬礼をした。

総合商社・松富士。秘書課の佐々木一華。

名前の通った大企業秘書で働く中堅の女性社員。

年収八百万。専属常務の後ろを高いヒールで颯爽と歩き、トレードマークの黒いワンレンのロングヘアを靡かせる、いわゆるバリキャリだ。

与えられた仕事は完璧に仕上げ、同僚のフォローもそつなくこなす。その隙のなさ故に男女関係なく周りから距離を置かれている秀才美女。私生活ではそろそろ次のライフステージに進むために自分磨きにも余念がないのだが、そちらの方はなかなか自分の計画した通りにいかず、進捗はよろしくなかった。

佐々木一華の理想は、自分のすべてを差し出しても良いと思えるほどのハイスペック男性・スパダリとの結婚。

「長身で清潔感があって社交性のある男性。定期的な運動習慣があり、年収は一千万以上——……あなた、まずは現実を知るべきね。そんな男性は結婚相談所にはいないわよ、女性に困らないんだから」

ド派手な巻き髪の大ベテランアドバイザーがテーブルを指で叩きながら盛大なため息をついた。

「今の条件を妥協できる条件と絶対譲れない条件に分けてもらっていいかしら。それと、婚活するんだったらその格好をどうにかしなさい。ヘアスタイルと服装ね」

「これですか？」

「そうよ。婚活は自己主張する場所じゃないの。相手に選ばれる必要があるんだから、少しでも男受けの良い格好をするべきでしょ。わかるかしら？ 一般的な男性は、自分より背が低くて、柔らかい服装をした女性が好み

なの。より多くの男性に交際を申し込んでもらいたいなら婚活の場では主張の強い格好は改めるべきね。あなた、結婚するんでしょ!？」

「わかりました」

「素直なのは良いことよ。できれば、その高いヒールもやめた方が——」

「わかりました、婚活やめます」

「そうね。ちゃんとやめられて偉い——え？ 何をやめるって、」

「婚活自体をやめます。短い間でしたが、ありがとうございました」

「ええ！ ちよ、ちよつとおおお!？」

婚活アドバイザーとの面談中、一華は退会の意志をはっきりと伝えてから、席を立って颯爽と退出した。

「えー、婚活やめたの？ でも、一華の場合は一人でも生きていけるお給料があるからいいんじゃない、好きに生きて。年収一千万でしょ。」

——え、そこまでないの？ でも、昇進していったらそのくらいいいですよ。いいじゃん、独身を謳歌しなよ。子供いると、自由にできないよ。子供は可愛いんだけど、もっと遊んでいたかったな。自由に思うもん。ほんと、ママ友との付き合いしんど過ぎい。話す内容、だいたいほかのママ友とか先生の悪口とか、旦那の不倫話とか、もうお腹いっぱい。胸焼けするもん。だいたい、あなたは理想の条件が厳しすぎるのよ。年収は一万クラス、長身イケメンでマッチョで、性格の良い男だっけ？」

「マッチョとは言っていない……」

「いない、いない、そんな男。いたとしても、もうほかの女に捕まえられるって。うちの旦那なんかさ、もうハゲてんだよ。ハゲっていうとちょっと薄いだけだって怒られるけど、いやー、あれは将来ハゲるね。だってお義父さんツルツルだもん。その時はこれ以上の男はいないって思っ

て結婚しても将来どうなるかわかんないんだよ。そんなもんだよ、男もガチャだよ」

一華は学生時代の友人の話を聞きながらストローでコーヒーを啜った。プラスチックカップの中にコーヒーは残っておらず、どれだけ啜っても溶けた氷の水分が胃に流れ込むだけであった。

よく理想が高いと言われる一華が男性に求める条件のうち、年収も、容姿も、性格も、彼女にとって実際はさほど重要な要件ではなかった。正直、それらは一華にとって等しく条件の中から取り下げても構わない程度のものであった。ただ、それらを取り下げた場合、代わりに異性に何を求めるのか具体的な条件をあげる必要が出てくる。

佐々木一華は自分が異性に求める絶対に譲れない条件をだれにも話したことはなかった。

すでに次の人生のステージに進んでいる大学時代の友人の話を、一華はどこか遠い国の話のように聞き続けたのだった。

「佐々木さん、秘書課の松下さんって付き合ってる人がいるか知ってる？  
もし、フリーなら、飲み会とかちよつとセッティングしてくれない？  
同期のよしみでさ」

終業間際、同じ年に入社した別の部署の男性社員がパソコンで作業をしている一華に話しかけてきた。

「だめです。今はコンプラが厳しいので、松下さんのOJT担当だったわたしにそれをやって、本人から“誘いを断れなかった”と言われたら完全アウトです」

「ええー、令和にも飲みニケーション大事だと思うよ！ 営業は結構飲みやってるし」

「……正直な話、裏でコソコソ手を回すより、堂々と正面からアピールす

る男性の方が松下さん好みですよ」

「え、マジ!?」

「マジです、マジ」

「じゃ、ちよつと後で自分でも誘ってみるわ。有力な情報サンキュー!」

「はいはい、いつてらっしゃいませ——……まあ、松下さんには結婚間近の彼氏がいますけどね」

彼がフラれようがどうしようが一華の知ったことではない。一華はパソコンの画面から一度も目を離すことなく作業を続ける。

「わたしは秘書だけど、あなたの個人秘書じゃないの」と、ほとんど接点のない営業課の同期社員を見送りながら一華は心の中で呟いた。

倉庫兼物置と化している四階のフロア。天井の蛍光灯も一本切れたまま放置されている箇所がある。そのくらいだれも立ち入らないフロアの女子トイレの個室がひとつだけ使用中になっていた。

「おオ~~~~~ッ!!」

トイレの奥からは低い獣のような呻り声が聞こえてくる。その声の隣では川のせせらぎと軽快な鳥のさえずる穏やかなメロディーが鳴り響き、じつにミスマツチな二重奏が奏でられていた。

便器に腰かけているのは佐々木一華だ。

スーツのスカートの下で股をおっ広げ、タフイーピンクのシリコン製ステイックがまんこに突っ込まれてブルブル震えている。ステイックは先端にあたる頭をまんこの中に突っ込んで、外に出ている胴体とリモコン部分がぐるんぐると円を描くように動いている。ステイックを咥えたおまんこの周囲からは潮が噴き出し、封水部分の水面にびしゃびしゃと落ちていた。

あたかも排尿しているかのようだ。

（キクう~~~~~ッ♡ やっぱ、これが疲れた脳に一番キクう~~~~~ッ♡）

日々の激務と婚活疲れでストレスマックスの一華は、発散のために一日三回のドギツイオナニーが習慣化していた。出社前、昼休みの休憩時、帰宅後のオナニー癖がやめられない。昼はこのためにだけに秘書室のある十五階からオフィスのない四階のトイレにまでわざわざ下りて来ている。

「おっ、おっ、おっ、んオッ！」

喘ぎ声が個室の外に漏れていても周囲に注意を払う余裕がないくらい、一華はまんこを自分の潮とまん汁でびちやびちやに濡らして自慰に耽っていた。

（どいつもこいつも厄介な案件ばかり持ち込んできて、いい加減にしてよッ！ 頼むなら三日前に持って来なさいよ！ もうやめる、自主的に人の仕事を肩代わりするのも、カッコつけるのもやめる！ それから、あのヤ

リチン！ 入社時期が一緒だったからって仲の良い同僚顔するんじゃないわよ！ こっちまであんたと身体の付き合いがある女みたいに思われて迷惑なのよ！ だいたい、秘書課の女に手え出しすぎ！ わたしのデスクの右の女に手を出した次に左のデスクの後輩にまで手え出すとかなに!? オセロじゃないのよ！

あと婚活よ、婚活！ なんで自分を我慢してまで結婚しなきゃいけないのよ！ いつか結婚はしないといけないとは思っていたけど、ファツションにまでいろいろ言われるんだったらムリ！ 絶対耐えられない！ いやわかってるわよ、そうした方が効率よく相手を見つけられるってことくらい！ でも、我慢して、効率あげて、そんな相手と結婚して、一生自分を偽って生きて幸せっていえるの!?)

ナチュラルな色のネイルをした指先がクリトリスをピンピンつ、と連続で弾く。

弾く速さも不満とともにスピードアップしていく。

（もう、何もかも全部いい加減にしてよッ！）

最大限に空気が入れられた風船のように快樂がパンパンに膨れ上がる。その限界が来たところで一華は我が物顔でおまんこを蹂躪していたバイブを一気に引き抜いた。

——ぬぼんッ！

「ンヒイツ!! お、ほおおおお~~~~ッ!!」

じよぼじよぼじよぼ~~~~、嬌声と同時に尿道から放物線を描いて尿が勢いよく放たれる。便座の上で思わず腰を突き出し、仰け反りになった一華の身体はビンビンに赤く勃起したつるつるのクリトリスを中心に小刻みに震えた。

「ふえ、あへえ~~~~……♡」

いつも澄まして仕事を完璧に遂行する知的な秘書は見る影もないほど顔を真っ赤にして呆けきっていた。

天井を仰ぎ見ながら一華は荒い呼吸を整える。

解放と同時に襲ってくる倦怠感に「自分はなにをやっているんだろう」と、一抹の虚しさを覚えた。

「はあ……午後からがんばろ……」

冷静さを取り戻した一華は後始末をして下着を履き直した。

トイレから出て洗面台でバイブを水洗いし、ペーパータオルで水気を拭き取った後、それを透明のビニール袋に入れてポーチに戻した。化粧ポーチの中には、ローター、バイブ、デイルドなど、お気に入りのオナニー道具がお洒落な化粧品に擬態して紛れ込んでいる。

秘書に求められるのはホスピタリティ能力。周りに悟られないようさり気なくリードしてサポートする。常に上司や周りに気を配り続ける業務は精神をすり減らす。だからこそ、プライベートでまでだれかをサポートする気にはなれない。

一華が親友にも明かしたことの無い異性に求める絶対に譲れない条件。それは、一華がリードやサポートをする必要がなく、さらには一華を支配

して虐めてくれるような主体性とサービス精神に溢れ、なおかつ一華に独占欲を持つてくれること。ただし、独りよがりで自分だけが気持ち良くなって相手を置いてけぼりにするような男はダメだ。

——自分だけのご主人さまに調教されたい。

そう、佐々木一華はシゴデキな秘書の仮面の裏に被虐的なマゾ女としての願望を秘めた人物だった。

一華はカツカツとヒールを鳴らして階段を上っていた。四階にはエレベーターが止まらないので、五階まで階段であがってからエレベーターに乗る。階段を上っている途中、自慰の余韻が残っていたのか足元がふらついて一華の身体が傾いた。

「あ、」

踵のヒールが階段を踏み外す。

一華の視界が非常にゆつくりと傾いていく。

とっさに手すりを掴めば転倒はさけられたかもしれない。しかし、一華はなぜか必死になって掴む気になれなかった。

——結婚に期待が持てないから？

——将来に希望がないから？

——独占欲マシマシのご主人さまに調教してもらえる可能性がないから？

働いて、自分磨きをして、婚活して、自分が本当にしたいことは何なのだろう。

「わたしだけの、ご主人さまに会いたい……」

そして、一華の視界は暗転した。



「…………あれ？」

固く目をつむった一華がいくら待っても恐れていた衝撃は襲ってこなかった。

身体は痛くない。

手足も動く。

思考も働く。

一華が恐る恐る目を開くと、ネイビーブルーの天井が見えた。

（違う——…これ、空だわ!!）

うつすら夜空にかかっている雲が移動しているのがわかる。中途半端にしゃがんでいた一華が立ち上がるために手すりだと思って触れたもの、それは薄汚れた白い壁だった。

立ち上がって左右を見渡すと、足下にゴミ箱、左右に建物の壁。自分が



てやろうか？」

「はあ？」

口で反論しようとしていた一華は尻を思いつきり掴まれ、カツと頭に血が上った。

反射的に足を上げてヒールで思いつきり男の足を踏みつける。

「そもそも何も売ってないから！」

「ぎゃ——ッ!!」

全体重を乗せたヒールの衝撃に、男はその場で足を抱えて転げ回る。もしかしたら足の骨が折れたかもしれない。

タダで若い女にさわれるわけがない。少し考えたらわかるだろう、自業自得だ。

「ばーか」

と、吐き捨てて一華は脱兎のごとくヒールで走り出した。

「あッ、待て、このアマッ！」

「いてええええええ！　くそッ！　ぜったい逃がすなアアッ!!」

追いかけて来たもう一人の男にロングヘアを引っ張られ、一華は立ち止まってしまう。

「痛ッ！　うそ、やめてよ！　週末かならず美容室でトリートメントしてもらってる髪なんだから、痛んだらマジで殺すわよ！」

「おい、その女逃がすなよ！　絶対犯す！　どうせ娼館から逃げ出した性奴隷だろッ！」

「はあああああ、性奴隷ですって!?　女にそういうレッテル貼るなんて時代遅れじゃないの!?　令和にアップデートできてないでしょ！　だいたい、わたしのレイプ願望はイケメンに限るの！　腐った油の臭いさせてるおっさんはでしゃばるんじゃないわよ！」

「な、なに言ってたんだ、このアマ……」

「あゝッ、うるせえーな！　とりあえず、口ふさげ！　何発か殴ったら大人しくなるだろ」

ヒールで足を踏まれた男は躊躇なく一華の顔を殴る。破裂するみたいな衝撃と灼熱感が頬を中心に広がり、ぐらぐらと視界が揺らいで一華はその場に立っていられなくなった。

「どこか連れ込むか？」

「もうここでもいいだろ。早く済ませちまおうぜ」

しゃべりながら男はズボンに手をかける。

（これ、マジでやばいんじゃない!? キモ、こんなおっさんに犯されるくらいなら死んだ方がマシなんだけど!）

男の手が一華のブラウスにかけられ、頭の中で危険信号が激しく点滅する。手を振り払おうにも男の力の方が強くてびくともしない。

もうダメ———そう思った時、路地裏の入り口の方から声がした。

「——おい、なにやってんだ」

ドスの利いた男の声だった。声の張りからして一華を襲う男たちよりずいぶん若い男と推測できたが、彼らは年下と思われる男の声に時間が停止

したかのように動きを止めた。その声は決して大きくはなかった。それでも、二人が一言一句聞き逃すまいと身体をこわばらせたのが一華にはわかった。

一華はブラウスにかかっていた男の腕の向こうに、足首まで隠れる紺色のローブを着た男の姿を見た。頭にかぶっているフードの隙間、そこから見える真っ白いくせつ毛の前髪。その奥で、鋭い瞳が異様にギラついていて瞼に焼き付く。

あまりの剣呑さに一華の背筋が凍る。本能が、男二人に取り押さえられている以上の危険性を警告してくる。

「……ぎやーぎやー、ぎやーぎやー、娼館の裏でサルみたいにわめきやがって。こっちはただでさえ気分が悪いっていうのによ……」

「——ゼノ、だ」

「おいおい、冗談だろ、覇級魔術師じゃねーか」

本能的な危険性を感じ取っていたのは一華だけではなかった。初老にさ

しかかった男たちもまた、己の命の危険を感じ取り、一華の存在をすっかり忘れてしまったようだった。

若い男は片頭痛持ちが良くそうするように、俯いてこめかみの辺りを指で揉んでいる。

都合が悪い相手であれば、彼が見ていない今この瞬間に逃げ出せば良い。それなのに男たちはよそ見をしているゼノという魔術師が顔を上げた時に機嫌を損ねるのを恐れ、足音一つ立てるのにも慎重になっている。

「わ、悪い……あんたがこの辺に来てるって知らなかったんだ」

「しッ、静かにする！　もうここで騒がねーから、このまま見逃し——」

男が話をしている途中で若い男が虫を払うように手を動かすと、男の言葉尻が消えて一華の鼻先で突風が右から左に吹き抜けた。次の瞬間、

——ドゴンッ!!

轟音が鳴り響き、一華の視界にある左の壁が破壊され、白い粉塵が舞い上がった。その間、一秒にも満たない。

クリアになりすぎた視界と爆音のコンボに一華の思考はショートする。飛び散った砂礫が皮膚をかすめ、肌がひりついた。夜だったのが幸いし、一華の前髪が数本、切断されてはらはらと地面に落ちたのに彼女は気づかなかった。

「……何度も言わせんな、こっちは気分が悪いんだよ」

軽率に見て良いものか悪いものかわからないが、一華は視線を数ミリ動かして抉れた壁を見る。そこには、自分に殴りかかろうとしていた男がそのままの格好で壁にめり込んでいた。眼球が飛び出しそうなほど目を見開いて小さく痙攣している。

災害にも見舞われず安全な国で平和を当然のものとして享受してきた一華には今起きている超常的な現象と不条理な暴力の因果関係が理解できなかった。

（これ、彼がやったの……？）

コスプレみたいな格好をした若い男に、非現実的な出来事。若い男が機

嫌を損ねたせいで、一華に暴力を振るおうとしていた男が吹き飛んだ。

どう考えても、映画の中のCG以外に考えられない現象だ。

狭い路地裏で発生した突風の余波で男のフードが脱げた。一華は現れた男の容姿に釘付けになる。

（え、——……ちよつと、ちよつとツ、まじ、イケメンじゃん！　なんかのアイドル!?）

ひと目見た時に背が高くスタイルの良さそうな男だとは思っていたが、少し線が細いので一華は特に興味をそそられていなかった。全貌が現れた今、予想外のイケメンぶりに一華は不謹慎にも興奮する。

ただ、惜しむらくは一華好みのイケメンではないという点だ。耳の縁にはびっしりシルバーピアスが並び、唇の端にもひとつシンプルなリングをつけている。夜職やバンドマンのような危うい雰囲気。

それでも十分にだれの目から見てもイケメンに部類される若者だ。精悍というよりも今流行りの洗練された透明感と中性的な容貌。幻想的な美し

さを売りにするドールに通じるものがそこにはあった。

陶器のように白い肌。薄い唇。ただ一つだけ、彼を人間らしく見せているパーツが血色の悪い目の下のくまという不健康さを象徴したものであるというのは、人間の不完全さを神が揶揄しているかのようでじつに皮肉が効いている。それさえなければ、魔術師のコスプレ衣装も相まって彼はビジュアルを追求した完璧なドールを体現していただろう。

足下で瓦礫の崩れる音がして一華は現実に取り戻される。腰を抜かしていたもう一人の男が四つん這いで逃げ出そうとしていた。

ゼノは蛆虫でも見つけたかのように眉を顰めた。舌打ちをして再び腕を動かそうとする。

「ちよ！　ちよつと待ってよ！　助けてくれてありがとうッ！　でも、これ以上はやりすぎだと思うの。あいつら死んじゃうわよ？　いくら正当防衛でも過剰な反撃は犯罪だからやめた方が良いんじゃない!？」

「は？　なに言ってるんだ、アンタは。それは俺が決めることで、性奴隷

の女にいちいち指図されることじゃねーんだよ」

「——はあ？ あんたも、さっきのおっさんたちも、人のこと性奴隷性奴隷って……女をバカにするのもいい加減にしなさいよ」

「実際にバカだろ」

男は一切の躊躇もなく一華の首に手をかけた。頸椎は音がするほど圧迫され、息ができなくなる。一華は男に首を絞められ、宙に吊り上げられる。足のつま先が浮き上がった浮遊感で一華はパニックになって首を絞める男の手を爪でひっかいた。

一華の必死な抵抗を男は物ともしない。痛みを感じていないのか、顔色一つ変えなかった。

「——っは！ ……かッ、はッ！」

「なにサマだ、アンタ。正義でも気取ってんのか？ 無能力者のくせにかい口叩くなよ」

（くるしいッ、しぬッ！ しぬしぬッ、これまじでしぬからッッ!!）

「ほら、がんばれ、がんばれ。なんの力もないのに正論を振りかざすのが好きなんだろ？ 大好きな正論でこのピンチも切り抜けてみせろよ、なあアツ！」

ロジハラ煽りを受けながら殺されかけていた一華の元に、一人の冴えないくたびれた格好の男が駆けつけてきた。正確には、ゼノと呼ばれる魔術師の元に。

「ちよ……つと、ゼノ様あ……つ！　そこまでにしてくださいよお！　あまり騒ぎを起こされるとウチも憲兵に怒られます……！」

怒られたらゼノ様も困るでしょ、と一歩下がって腰を低くして諭すと、魔術師は「ちッ」と舌打ちして一華の首を締め上げていた手を離した。

地面に落とされた一華はしたたかに尻を打ち付けたが、そんな痛みよりも呼吸を再開することに必死になっていた。

「ごほごほッ！　——ッ、おえ……ッ、」

ひゅー、ひゅー、と狭まった気道が音を立てる。手の震えが止まらない。

「おやあ？　これは何ですか、ゼノ様？」

一華に気づいた男は適度な距離を保ったまま一華を見下ろして来た。

「ア？　アンタのところから逃げ出した商品じゃないのか？」

「ウチはそんな杜撰な管理はしてませんけどね。見たことない顔ですが、一応連れて行きますようか」

呼吸も整わないまま、一華は腕を引っ張られ強引に連れて行かれることになった。

## 二章 異世界人と迷い人

「娼婦が入れているはずの所有印がないので、この女は性奴隷じゃないです  
ねえ」

路地裏から出て大通りの一面にある歴史を感じさせる洋館に連れて行かれた一華は、そこで年かさの女や用心棒風の男たちに取り押さえられて身体  
のきわどい部分をあちこち確認された。

「だから最初っからそう言っているでしょ！ だいたい、性奴隷ってなに  
よ！ 悪口じゃないの!? ホンモノの身分制度のこと!？」

ゼノと呼ばれた白髪の男と、この建物のオーナーらしき人物は騒ぐ一華  
を無視して話を進める。

「じゃあ、こいつはなんであんなところにいたんだ？」

「珍しい容姿に見たこともない服を着ているので、おそらく迷い人ではない  
でしょうか？ たまにいますよ、異界から迷い込む者が」

「異界ねえ。そういうのは子供向けの作り話だと思ってたんだがな」

「童話の中に少しずつ真実を混ぜてあるんです。ああいうものも案外バカにできないものですよ」

「異界ってなによ……たしかに、みんなヘンな格好してるし、建物もなんか雰囲気おかしいけど、ここ、日本でしょ……言葉だって、日本語通じてるじゃない……」

ブツブツ呟く一華を見下ろしてゼノは威圧する。

「ニホン語だア？ ギディア語だろ」

ゼノに首を絞められたトラウマから一華はすぐまれて萎縮するが、それでもひるむことなく応じる。

「はあ？ ギディア語ってなによ。その冗談、面白くもなんともないんですけど」

一華が周りを見渡すと、他のゼノと話をしていた店の主や従業員たちは不思議そうな目で一華を見ている。まるで、一華だけがこの世界で異質な

物であるかのように。

「え、やめてよ、どうせドツキリでしょ？ 転移とかそんなアニメみたいなことが起きるわけじゃないじゃん……。やだ、ねえ、嘘ついていてよ。早くネタばらししてくれないとさすがに堪えるんですけど……」

「そうですねえ。嘘だったら楽なんですけどね、お互い」

「ほんとに突然異世界に飛ばされましたとかそんなことある!? 仮に起きたとして、帰る方法はあるのよね!？」

「いや、私はただの娼館の主なので、そういうことには詳しくないんですよえ。困りましたね」

「嘘でしょ!?! わたし、これからどうしたらいいの……」

「とりあえず、憲兵を呼びますのでその方々の指示に従ってください。迷い人は国に届け出なければいけませんし、ふらふら外を歩いているとまた性奴隷と間違われてしまいますよ」

いい年した初老の男たちに襲われかけた記憶がよみがえって一華はぶる

つ、と身体を震わせた。

「あの、さっきから性奴隷、性奴隷って言われるのはどうしてですか？あまり言われて嬉しい言葉ではないんですけど」

たしかに一華には調教されたい願望はある。だが、それが許せるのは特別な相手にだけだ。

「ああ、それはですね、こちらの世界の女性というのは男性より立場が弱いんですよ。これでも昔に比べたらずいぶんぬるく——いや、失礼。改善された方なんですけどね。一番扱いが良いのは表面上は男性と対等に扱ってもらえる貴族の女性。次が父親や夫の保護下にある庶民の妻や娘。もともと地位が低くて層が厚いのが性奴隷の女です。この国に男性の付き添いもなくふらふらしている女がいたら、たいてい逃げ出したか捨てられた性奴隷だと思うものですよ」

「なにそれ、こわっ。差別的すぎる」

一華は衝撃的な価値観に思わず顔をしかめた。

（好きな人になったら奴隷犬扱いはされてみたいけど、不特定多数の病氣持ちかもしれないおっさんに性奴隷扱いされるのは生理的に無理なんですから！）

そんな一華の内心が手に取るように理解できた娼館の主は、ころころと変わる異世界人の反応を興味深そうに観察する。

（この子、感情が顔に出やすいな。見てるだけなら面白いけど、うちではやっていけないだろうな。それに、この国では反抗的な子は人気出ないからなあ。毛色の珍しさで、一見客ならつくかもしれない）

「あの、私がこの世界の人間ではないからってオーバーに話してませんよね？」

「うーん、別にそれが普通の感覚なんですが……ねえ、ゼノ様」

「は？ 当然だろ。なんで男と女が対等なんだよ。女は子供を産んで育てるか、男の性処理をするためのだけの存在だろ」

あけすけな物言いに、ほら、と言わんばかりに娼館の主は肩をすくめて

みせた。

出合い頭に首を絞めてきたゼノという男も頭がおかしいが、この娼館の主も大概一華の知っている常識とはズレている。そして、それをさも当たり前だと普通の顔をしているところが恐ろしい。

これ以上深く聞かない方がいいのかもしれない。藪をつついて蛇やそれ以上に恐ろしいものを出して精神的な負担を抱えたくない一華は、追求するのを止めた。

「ゼノ様。提案なのですが、この子を引き取ってはいかがですか？」

「はあッ!?　なんで俺が!」

「覇級は迷い人の所有権を優先的に認めてもらえるんでしたよねえ。せっかくなので、所有してはいかがですか?　うちの子たちもあまりお気に召されていないようですし、相性が良くないのでしょう。その点、迷い人は相性は関係ないといえますし、ダメだったらうちで引き取りますので、試してみられては?」

娼館の主に提案されたゼノは心底嫌そうな表情を浮かべる。

「今まで男性と同じように優遇されるのが当たり前前の世界で生きてきたのなら、性奴隷として生きるのは難しいでしょう。一日に何人も男を相手にしないといけないのに、先ほどのようにたった二人の相手をするのですらひどく嫌がるくらいの潔癖のようですし」

「潔癖とかの問題じゃないでしょ!? 当然の権利なんだけど!」

一華が口を挟むが、娼館の主は平然と自分の話を進める。

「ゼノ様の専属としてやっていくのが彼女にとっても幸せでしょう」

「わたしを殺しかけた男と一緒にいるのがわたしの幸せですって!」と、一華は娼館の主の大胆な発言に目を剥く。

「それ、本気で言ってるんですか!」

いやいや、信じられない。一華の唇が戦慄く。

「憲兵に保護されても、最終的にこの世界での女性の末路は同じです。貴族に価値を見いだしてもらえたならば貴族に囲われ、そうでなければ娼館

で一生男の相手続ける。結局、どちらで暮らしても実態は変わらないと思いますけどね」

「あの、それしか選べないんですか？　わたし、第一希望は元の世界に帰りたいんですけど……」

「少なくとも私は聞いたことないですよ、迷い人が元の世界に帰ったという話は。何人か、迷い人を他の店で見たり、うちで取り扱ったりしたこともあるんですけどね、皆さん壊れやすくてあまり使い物にならないんですよねえ。だから、うちにはあまり置きたくないんです」

出会った時からずっと変わらない娼館の主の柔和な笑みが途端に不気味なものに思えてきて一華はぞつとして自分の身体を抱きしめた。

その後、一華はやってきた二人の憲兵と話をしてこの世界についての説

明を受けたが、店主が話していた以上の新しい情報は得られなかった。

元の世界に帰る方法は確立されておらず、こちらに来てしまった迷い人は貴族が気に入れば貴族に引き取られ、貴族の需要がなければ自分の食い扶持を稼ぐために性奴隷として娼館で働くことになるという。この世界に女性が労働の対価として金をもらえる仕事は多くない。性奴隷は娼館で延々と終わりなく男の性欲処理をさせられ、貴族の女は家庭に入って夫の言うことに忠実に従い、子供を作ることが義務とされている。

自分の希望したささやかな生き方が叶う可能性があるのは庶民の女性だが、決して治安が良いとはいえない国なので、庶民の女性は暴行などの犯罪に巻き込まれる可能性が高いという。

ただひとつだけ、三つのルート以外に身の安全が保障され、貴族の女性ほど義務に縛られず、性奴隷の女のように延々と男の性欲処理をしなくてもすむかもしれない例外的なルートが存在する。

それが、娼館の主のいていた覇級魔術師の所有物になる方法だ。

覇級魔術師の身体には、一般的な魔術師とは比べものにならないほど大量の魔力が蓄積している。魔力が堪りすぎると、脳や精神が魔力の負荷に耐えきれず破壊される。そのため、覇級魔術師は魔力が溜まりすぎないように大量の魔力を消費する大がかりな魔術を行使するか、異性と性交をおこなうことによつて相手に魔力を移行させて放出する必要がある。

大規模な魔術を行使する機会はそうないため、尋常ならざる魔力を保持する覇級魔術師は国の法律により定期的な性交が義務づけられている。娼館の主とゼノが親しい理由がそれだ。

かかる費用はすべて経費として国が負担。覇級魔術師自体も希少価値が高く、破格の高給取りのため人々の羨望を集める職業。

万が一にも踏み倒される心配はなく、頻繁に通ってくれる彼らの存在は店にとって宣伝にもなる。覇級魔術師お抱えの店になれるというのは娼館にとってもかなりのステータスなのだ。

「はい、質問です！ 性行為をして他人に魔力を移すってことは、移され

た人も魔力が使えるようになるのでしょうか？」

「それは無理ですねえ。魔力の保有量についても人それぞれ限度が決まっています。一般人は魔力を移されてもあまり貯められないので、残りはそのまま垂れ流されるだけです。それに、魔力を持っていたとしても使えるかどうかはまた別の話です」

「えーッ、魔術を使うまでにいくつもクリアする条件があるんですか!？」  
「魔術を使うって大変なんですね……」

「そうなんです。魔術師になれるだけでも特別なことなんですよ。ましてや覇級魔術師なんてこの国に数人しかいない。彼らの存在はそれほどまでにすごいことなんですよ」

「へえー、店主さんって魔術師について詳しいんですね」

娼館の主より説明を受け、一華がそう感心していると、一呼吸置いて娼館の主から穏やかな空気が消えた。ただ、顔に浮かべた笑みはなにも変わっていない。何か地雷でも踏んだのだろうか、一華が内心焦っていると、

「この世界ではだれもが知っていることですから」

と、娼館の主は会話をそう締めくくった。

「そ、ソウナンデスネ……」

一華はそれ以上なにも言えなくなった。

そして、娼館の主が従業員に呼ばれて席を外すと、同じテーブルについていた憲兵の男がすかさず口を開いた。

「——それで、あんたはどうするんすか？」

まだ若い男だ。今後の身の振り方について「早く決めろ」といわんばかりに、あからさまに面倒くさそうな態度を隠そうともしない。

娼館の主がいるといたないとは態度が百八十度違う。気の短い一華は「はあ？」と鼻白んだ。憲兵の男は一華の憤りなどお構いなしに自分の意見を押しつけてくる。

「女の迷い人なんてどうせここでしか働けないんすよ。貴族に気に入られるかも、なんて高望みはあとで恥かくだけなんで、やめた方がいいっすよ。」

あんたぐらいの女、この国には余るほどいるんで」

「そうそう」

相方の憲兵が相づちを打つ。

「ま、せっかくなんであんたが売り出されたら一度くらい買いに来てやつてもいいですよ。どうせ人気出なくて困るだろうし。その後、通つてやるかはあんたの態度次第っすけどね」

「お、いいなソレ。一回くらい迷い人の女を試してみたいよな。迷い人つて二十年に一人出現するかどうかのレアだしな」

「アソコの具合がこっちの女とどう違うのか気になるよな」と男二人は下ネタ談議に花を咲かせている。

（はあ？ なんなのこいつら、腹立つ。こっちの男つて、みんなこんな感じなの？）

本音はわからないが娼館の主は一華の考えを尊重してくれていた。目の前にいる憲兵の男たちや、一華を襲ってきたおっさんたちの態度から、女

性に対しての扱いは不本意ながらこちらがデフォルトのように思えた。

「どうですか？ 身の振り方は決められましたか？」

やがて娼館の主が用事を済ませて戻ってきた。

「すぐには決めきれないでしょうから、あなたさえよければ数日うちの娼館に客人としてお泊まりいただいてもいいですよ」

「いえ、もう決めました」

「おや、早かったですね。それで、今後どうしますか？」

「わたしの選択は——」



起床したゼノはいつもの片頭痛のせいで朝からイライラしていた。常人よりはるかに魔力保有量が多い彼は生まれてこの方、片頭痛に悩まされな

い日はなかった。片頭痛による不機嫌がこの覇級魔術師のデフォルトである。そして、それは彼が生きている限り不変的なものでもあった。

ゼノはキツチンで豆を挽いていた。

コーヒーを飲むと幾分痛みがマシになる気がして、ゼノは朝のこのルーティンを大事にしていた。

しかし、その日、彼の至福のひとつときは突如やって来た来訪者によって破られることになる。

ゼノは常時自宅の周りに結界を張り巡らせている。並の魔術師では彼の結界に傷ひとつ入れることはできない類いのものだ。

結界の中にだれかが侵入して来たのがわかった。一人だ。魔力はまったく感じられない。結界内では魔術による攻撃はもちろんのこと、物理的な攻撃も無効化される。一般人の侵入ならば放っていても問題はなかった。

ゼノは細かく挽いた豆の上に円を描くよう量を均一にして湯を注ぐ。じつと黒いコーヒー豆の粉を注視する彼の視界には、呼吸をするかのように自

然に発動された透視魔術で境界内の映像が映されていた。侵入者がだれなのかまで彼は把握していた。だから、彼は至福の時間は不可侵のものだと確信していた。その瞬間が来るまでは。

——ピンポーン、

ゼノは微動だにせず湯を注ぎ続ける。

——ピンポーン

コーヒーで満たされたマグカップを顔の近くまで持って行き、回すようにマグカップから立ち上る匂いをくゆらせる。

——ピンポーン

ゆっくりと匂いを堪能してから白いカップに口付け……

——ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピポ、ピポ、ピポツ、ピ、ピ、ピ  
ピピピピッ！

「……ちッ！」

ゼノは一瞬で転移して玄関の扉を勢いよく開けた。

「うるせえッ！ 聞こえてんだよ!!」

「あ、良かった。ぜんぜん出てくれないので家の中で倒れているのかと心配しました」

（はあッ!? 白々しい）

玄関に立っていたのは、先日、路地裏で酔っ払いに絡まれていた迷いの女だった。

身体の線を強調した独特の服装。この世界の女はゆったりとスカート丈の長い服、もしくはは奴隷女であれば恥部を隠すだけの面積の少ない服を着るので、そのどちらにも属さない服には違和感がある。

爽やかに微笑む一華に、ゼノは底なしの厚かましさを感じた。

「なんでココにいるんだよ、アンタ」

一華は営業スマイルを浮かべてから、腰をほぼ直角に曲げた。最敬礼のお辞儀だ。

若い迷い人の女がここに来た理由にゼノはだいたいの察しがついていた。

今後の身の振り方に関することだろう。

この国は女として生まれただけで男より劣った生き物と見なし、男とは全く違った扱いをする。若者や、先鋭的な考え方をする学者の中には古くからの価値観に異を唱え、女性、とくに自分の妻を大事にする男もいるにはいるが、それはごく少数派だ。大半の男たちは古くからの慣習をなんの疑問も持たず、ただ踏襲している。

ゼノは女という生き物の過酷な人生難易度設定には同情するものの、それは家畜に対する同情と同じで、寝て起きれば次の日には忘れている程度の一時的な感情の揺らぎだった。

彼の場合、女性への認識は彼の性質に根ざしている側面が大きい。それはこの国、引いては世界の構造が魔力量の高い魔術師にどうしようもなく依存しているという現実が何世紀以上も続いているからに他ならない。覇級魔術師とはその国の軍事力と見なされ、彼らを一人でも多く有した国が世界の交渉の場において有利になる。加えて、ゼノは他人への興味関心や

執着が薄い。大半の国民がそうであるように彼もまた魔力至上主義の思考であるため、魔力保有量の多い自分はすべてにおいて他者よりも優れた存在であるという偏った思考に疑問を持つことはなかった。

国が主導してきた過剰な覇級魔術師への忖度と、それを当然のものとして享受して来た彼の驕りが客観的な視点を歪めていた。

ある意味、彼は国の政策における被害者ともいえた。

その一方で、万能なはずの自分が男より劣る性別の女に魔力消費の面で頼らなければまともに生きられない現実を苦々しくも思っていた。

「はあ………、用件はなんだ」

「交渉しに来ました」

「とりあえず、いつてみる」

「ぜったいに損はさせません。わたしをここで働かせてください」

「話にならねえ」

扉が閉められそうになり、一華は慌てて身体を割り込ませる。

「ちよつ、え、まつツ！　話を聞いてください！」

「意味がない」

覇級魔術師は国から手厚く優遇されている。なにかトラブルを起こしても大抵のことは容認される。

支払われる報酬も破格だ。金は一度の人生では使い切れないほど稼ぐ。手に入れようと思えばすべてが手に入る地位もある。やろうと思えば個人の力だけで国家転覆も可能だ。

そんな覇級魔術師に迷い人の女がなにを提供するというのか。

「アンタをここに置く——つまり、保護してほしいってことだろ？　俺になんのメリットもねえ。そんなことをしてやる義理もねえ。だから、この話はこれで終わりだ」

家の中に戻ろうとするゼノを一華は引き留める。彼女も無策で彼を訪ねたわけではない。

「わたしの話を聞いてください！　わたしを保護するメリットをお伝えし

ます。わたしは元の世界で秘書をしていました。上司のサポートに徹する仕事です。

魔術師にも書類仕事があると伺いました。書類整理、原稿代筆、資料集めを始め、スケジューリング、外部との連絡、来客対応、交通手段や会場、衣装の手配もします。この世界のやり方、資料を見せていただければ一週間に対応してみせます！ 散らかったご自宅の整理整頓、家事労働も可能です！」

「そのスケジューリングとやらは本当に必要とする人間がいるのか？ なくても今までやって来れたんなら、別にこれからもいらねえーだろ」

「ツい、いいえッ、僭越ですが、ゼノ様は出勤頻度に波があるとお聞きしました！ それにより、他国との交渉が難航したのは一度や二度ではないとのこと！」

「ちッ、だれだよ、バラした奴は。……ま、難航しても結局、覇級魔術士を有している国には逆らえない。ンなの、出来レースだ」

すると今まで営業スマイルを貼り付けていた一華の顔が急に真顔になった。

「それは違います。たとえ同じ結果を得られたとしても、トラブルが発生した場合となかった場合では、圧倒的に仕事のコストパフォーマンスが変わるはずです。もし、交渉がスムーズに進められていたとしたら、調整にかかった費用や手間は省略できますし、余った時間は次の仕事に割りたり、休息の時間に充てたり、有意義に使えるようになるはずです」

一華の黒い瞳には不安や動揺といったネガティブな挙動は見られなかった。信念を持って成し遂げてきた経験による揺るぎない自信が確かにあった。それは、この世界の女たちにはないものだった。

「……一週間もかかるのか？」

「え、あ、仕事始めのことですね！ いえッ、三日でやります！」

一華は即答した。

それは賭けだった。できるかどうかじゃない。一華はもうやるしかない

のだ。

（わたしの貞操がかかってるんだから！）

「ただ、アンタは小言がうるさそうだからなア。女も平等に扱えとか言い出すタイプだろ。たまにそういう思想の奴がいるんだよなア、どうせすぐに肅正して再教育されるけど」

頭を左右に振ってガシガシと乱暴に髪を掻いたゼノは、じつと一華を凝視して「アンタ、そういうタイプだろ」と直球で尋ねてくる。

——ごく、

一華は喉を鳴らす。ここでの回答によって、一華の運命は複数の男の慰み者になるか、強力な後ろ盾を得られるかが決まる。

「いいえ、自分の権利は主張しません。覇級魔術師様の行動を自分の尺度で判断し意見を述べることもしません。誓います。最低限の衣食住とこの身の安全を保証していただけるのであれば、自分の思想は主張しません」

「あのなア、そもそも覇級魔術師が迷い人を自分の側に置いておく理由、

わかってんのか？ スケジュールとか家事労働とか、そんなもんはこっちにとつてメリットでもなんでもねえーんだよ」

「……………」

「なんでアンタが自信満々に交渉しに来たのか、誰かに唆されたのかわかんねえーけど、この国で女の価値も役割も、迷い人、貴族、庶民、性奴隷、そこに大きな違いなんてないんだよ」

嫌な予感に一華の心臓がどくどくと激しく鼓動を打ち始める。

「普通に考えたらわかるだろ」

（ああ、うるさい）

一華は頭を振る。艶やかな黒髪がばさばさと左右に揺れる。

わかってる、わかってる、そんなことはわかってる！

わかってるが、その結論は認められなかった。それが正しいのであれば、どうやったってこの世界で出会った下卑た男たちの視線から一華は逃れられないということになる。あの扱いが、この世界で正しいということ

になる。そんなの認められるわけがなかった。それは地獄のような世界で生きろと言われているのに等しかった。

一華の頭の中で警告音が鳴り響く。

目の前の男、覇級魔術師とかいうこの国で最も特権をほしいままにしている男の口を塞がなければという衝動に駆られる。

一華が手を伸ばすよりも先に、ゼノの薄い唇がこの国の真理を非常な神のごとく突きつける。

「わからないならわかりやすく言ってやる。この国で女に求められている役割は子を産むことだ。迷い人ならそれに追加して魔術師の魔力消費のためのサポートが求められる。ようは『覇級魔術師専用の性奴隷』だな」

「——ッ！」

一華の手が途中で止まる。

やはり、そうだったのだ。

女というだけで、この世界に希望はない。今まで出会ってきた最低な男

たちの態度は、この世界において当たり前のものだったのだ。

一華の絶望などお構いなしにゼノはこの国の仕組みをつまびらかにする。「この世界の人間は大なり小なり魔力を持っている。魔力には相性がある。

相性が悪ければ性交渉の良さも半減して繁殖力も落ちる。魔力量の多い子供を一人でも多く望んでいる国としては力の強い魔術師に子供を作らせた。だが、魔力量が多い魔術師ほど繁殖しにくい。その点、迷い人は魔力を持たない人間ばかりだ。魔力の反発における相性の悪さも繁殖のしにくさも関係ねえから魔術師の相手としては最適だ。だから、迷い人の所有権を国は覇級魔術師に優先的に与えているんだよ」

ゼノは口を挟めずにいる一華のことなどお構いなしに話を進める。

「わかるか？ がんばって性奉仕から逃れようとしているアンタには不都合な事実だろうが、結局、迷い人に求められている役割は性奴隷や子供を作るのが義務の貴族の女と変わらないんだよ」

「……………」

「ただ、アンタが賢かったのは俺を選んだところだ。幸い、現時点で俺は子供の繁殖には興味がねえ。ガキを作らなきゃおいおい国からペナルティーは受けるだろうが、まだ時間はある。俺は人から指図されるのが嫌いなんだ。俺より弱い人間になんで従ってやらないといけないんだ？」

一華は顔をあげてゼノを見る。一本のか細い光が見えた気がした。

「だから、俺はアンタを孕み袋にすることに興味はない。アンタが有能ならここに置いて保護してやつてもいい。あくまでも、保護するだけだがな。保護する価値もないならすぐに外に放り出して、その辺の、女に飢えた野郎どもに種付けさせて孕むまで見世物にしてやるよ」

（ほんと、こいつ良い性格してるわ）

軽蔑したのが伝わったのだろう。ゼノは片方の唇だけ歪めて酷薄に笑う。「わかってるよな。俺を選んだってことは、アンタは俺専用の性奴隷であることを受け入れるってことだからな」

「……その、そういった性的なお仕事は今後必要になって来ますか？ 絶

対条件ですか？ 覇級魔術師様は女は選び放題、不自由していいと聞きました。ゲテモノはお口に入れない方が賢明かと思いますが……」

「ゲテモノもたまに食べたくなるだろ？ ま、安心しろ。アンタは俺の好みじゃねえーし、俺は女には不自由していい。性欲処理の仕事を振ることはまずないだろうが、上下関係と自分の立ち位置を理解しねえーやつは嫌いなんだよ」

一華がここで絶対にそれはできないと拒否すれば、今までの交渉は無に帰すだろう。

引くか、突き進むか。

絶対的優位な立場にいる目の前の男は逃げ出す獲物は追いかけないだろう。覚悟がないやつは切り捨てられるだけだ。

昨夜の裏路地で酔っ払いに襲われた時のことを思い出して一華は震えそうになる身体を押さえた。この世界にいる限り、いつ、どこで、不特定多数の男に襲われるかもしれないという恐怖におびえ続けることになる。そ

んなのは御免だ。少なくとも、このゼノという男の保護下にいれば、その恐怖からは逃れられる。ただし、その見返りは自分の貞操――

「一度だけなら、対応します。ただ、一度つきりです……」

「一度ねえ。ま、俺の好みじゃないし、一度試せば十分か――」

「ま、それでいいわ」といつて、ゼノは玄関のドアをすべて開けた。

役者のように胸に手を当て、仰々しくお辞儀をしてみせる。

「ようこそ、この国最強の覇級魔術師の館へ。この国にいる間は身の安全は保証してやる。俺以外、だれもアンタに指一本触れられやしねえ――よ」

一華はその言葉にぽかん、とする。

（え、こいつ、この国で最強の魔術師だったの!?!）

今更ながらにとんでもない男と交渉していたことに冷や汗が出てきた一華であった。